

Virginia Woolf の *To the Lighthouse* と Kazuo Ishiguro の *A Pale View of Hills* における「アウトサイダー」をめぐる

榊 原 理枝子

1. Woolf の「アウトサイダー」

Virginia Woolf は *Three Guineas*⁽¹⁾ (1938) において、男性を闘争的にし、戦争へと駆り立ててきた教育システムを批判しつつ、そうしたシステムの外部にいた女性、特に彼女自身を含む階級の女性たちを「教育を受けた男性の娘」“daughters of educated men” として位置づけ、その立場を「アウトサイダー」(Outsider) と呼び、文化的・政治的アイデンティティとしている。またここで Woolf は「武力行使に訴えない」ことを「第一の目的」とする「アウトサイダー協会」“Outsiders' Society” を構想している (TG 232)。そして、闘争本能を増長させるシステムの内部にいなかったという点で Woolf は女性の立場に注目し、彼女たちの立場こそが反戦を唱える主体と成り得ると主張した。Woolf はきわめて否定的な意味で、狭義の「愛国心」(“patriotism”)⁽²⁾ を捉え、また国家・教会など、国家イデオロギーを象徴するものへの「忠誠心」(loyalty) を否定した (TG 203)。また、Woolf は自国の文明の優越性を過信し、自らの文化を他者に強要するイデオロギーを批判し (TG 235)、こうしたイデオロギーこそが帝国主義政策を支えてきたと主張している。Woolf が批判の対象としたのは、イギリス帝国主義だけではなく、それを支えてきた支配を正当化する言説としての家父長制のイデオロギーである。

このような視点を *To the Lighthouse*⁽³⁾ (1927) の読解に持ち込んでみよ

う。TL は “The Window” / “Time Passes” / “The Lighthouse” の 3 部から成る。“The Window” は、ほぼ一日の物語である。TL の Mrs. Ramsay は、横暴な夫 Mr. Ramsay に喜んで仕えている。また Mrs. Ramsay は、8 人の子どもたちの良い母親であり、母であることに幸福を見出している。さらに、彼女を慕って Ramsay 家の別荘に滞在している客人たち——そのなかには評価されていない画家 Lily もいる——を暖かくもてなす。つまり、ヴィクトリア朝イギリスの幸福な家庭の典型のような家庭が、Mrs. Ramsay を中心に形作られている。ゆっくりと物語が展開する “The Window” とは対照的に、“Time Passes” は第一次世界大戦を挟む約 10 年の歳月が急速に流れる。大戦中、Mrs. Ramsay は Mr. Ramsay を残して死ぬ (TL 110)。また Ramsay 家の娘 Prue は、Mrs. Ramsay と同じく美人で優しく、いずれは Mrs. Ramsay のような幸福な家庭を築くと思われていたが、結婚後まもなく出産にかかわる病気で死ぬ (TL 112-13)。さらに、Ramsay 家の息子 Andrew は、優秀で、Ramsay 夫妻が特に期待をかけていたが、戦死してしまう (TL 114)。“The Window” において、Mrs. Ramsay は、当時 33 歳の Lily にしきりに結婚を勧めていた。Mrs. Ramsay は結婚しないことは不幸であると信じていたのである。しかし Lily は、結局結婚しなかった。“The Lighthouse” で、Lily は、再び Ramsay 家の別荘に行き、10 年前に Mrs. Ramsay と息子を描こうとして描けなかった絵を完成させる。

こうして中心的なプロットの展開を追うと、イギリス家父長制の理想像としての家庭の消滅、つまりはイギリス家父長制の崩壊を読み取ることができる。そもそも、Lily のような結婚しない女性、すなわち家父長制の再生産にかかわらない存在が、Ramsay 家の人々を語るという物語の構造自体が、家父長制の外部にある者がその崩壊を見据えるというスタイルであるという読みも可能であろう。他に、Mrs. Ramsay が結婚させた Paul と Minta が、Mrs. Ramsay が考えていたような夫婦はならなかったというエピソードを、そして、Lily と William Bankes を、Mrs. Ramsay は結婚させたがっていたものの、二人が結婚しなかったということを、イギリス家父長制を根底から支えてきた家庭重視のイデオロギーの弱体化の象徴として読解することも可能である。すなわち、イギリス家父長制が理想としてきた家庭像がもはや理想として、そして規範として機能しなくなったということである。

To the Lighthouse と *A Pale View of Hills* における「アウトサイダー」をめぐる

また、TGにおいて男性社会の作り出したイデオロギーを疑問視する存在とされる「アウトサイダー」の系譜に、TLのLilyも並ぶと言える。彼女が「教育を受けた男性の娘」であるかということについては、Lilyの父がいかなる人物であるかは具体的に明らかにされていない。だが、Mrs. Ramsayのようなヴィクトリア朝的な家庭の妻になるのではなく、芸術家を目指すLily——結婚を勧めるMrs. Ramsayに対し、Lilyは私には絵があるという反論をしている(TL 44)——は、イギリス家父長制のイデオロギーに抵抗を示す女性として十分に「アウトサイダー」の資格はあると考えられる。こうした「アウトサイダー」的性質、換言すれば、イギリス社会における「他者」としての側面が、「中国人のような眼」をしていると表現される彼女の風貌に比喩的に示されている⁽⁴⁾。

Woolfの提唱した「アウトサイダー」という概念が、その後のイギリス小説にどのように引き継がれているのかという問題を論じることと、また、この問題と密接に絡み合っているが、Lilyにおいては彼女の「中国人」のような風貌において比喩的に示されていた「西洋」における「他者」としての「東洋」が、どのようにその後のイギリス小説において表象されてきたのかということを考えるのが、本稿の目的である。この問題意識の持ち方を次のようにも言えよう。Woolfの「アウトサイダー」とは、広義に解釈すると、支配的イデオロギーを共有しない者ということになる。Woolfのテキストでは、「東洋」性が比喩的に「アウトサイダー」であることを表象しているが、このような「東洋」の表象が、その後のイギリス小説においてどのように変奏されているのかということを本稿で論じたいということである。始めに断っておきたいのは、本稿で「東洋」と言う場合、オリエンタリズム⁽⁵⁾のニュアンスを込めた、「西洋」に対しての「東洋」であり、「西洋」の視点からの表象としての「東洋」であるということだ。さらにまた、19世紀半ばから始まるジャポニズムの流行が、18世紀のシノワズリーと呼ばれる中国趣味と深い関係にあったことをも考慮して、「中国」・「日本」の表象を、「西洋」に対する「東洋」と捉えて論じる。

こうした関心から、Kazuo Ishiguro, *A Pale View of Hills*⁽⁶⁾ (1982) を見たいと思う。上記の関心事を論じるのであれば、もっと数多くの作品を取り上げることによってより微細な研究をすることも可能であろう。だが、こ

ここでは特に、「アウトサイダー」と小説における表象としての「女性」、また表象としての「東洋」という限定的な問題を取り扱うため、主に Woolf の *TL* と、Ishiguro の *PVH* を取り上げ、この二つのテキストにおける「東洋」の「女性」の描写——比喩的な表象も含めて——を論考することで、上述の方向からの研究への道を拓き、新たな批評的姿勢の可能性を提示したいと考えている。

Woolf は、家父長制のなかの女性を——もっとも「教育を受けた男性の娘」に限定してはいるが——「アウトサイダー」と見た。Woolf 自身、「アップーミドルのイギリス人女性で女性モダニスト」としての「インサイダー/アウトサイダー」という立場であったと Lisa Williams は指摘しているが (82)、Ishiguro もまた「イギリス社会においてイギリス人ではなく、非白人の作家」という意味で、イギリス内外の批評家たちに「インサイダーでありアウトサイダー」(Wong 20) と見られてきたという。加えて、Ishiguro が彼自身のことを “a kind of homeless writer” (Oe and Ishiguro 115) と考えているという意味で、「アウトサイダー」的な側面を持つということも否定できない。こうした両者の「インサイダー/アウトサイダー」というスタンスが、「アウトサイダー」の表象にかかわっていることは確かであろう。本稿は、表象としての「アウトサイダー」を考えるために、Woolf と Ishiguro を並べてみようという試みであり、女性作家/男性作家であるといったジェンダーの問題や、人種の問題には深入りせず、すでに述べた問題に論考を集中させようと思う。また、「西洋」における表象としての「日本」がオリエンタリズムの問題といかに絡み合っているのかということも考察するのが本論の目的である。

2. Woolf のオリエンタリズム、女性、国家そして Ishiguro

Elizabeth Abel は、*TL* の Lily を、東洋的な風貌であるという点や、結婚よりも仕事に関心が強いという点で、*Mrs Dalloway*⁽⁷⁾ (1925) の Elizabeth との連続で見ている (Abel 33-34)。Elizabeth は、*MD* のヒロイン Clarissa Dalloway の一人娘で 17 歳である。容姿に関しては、Elizabeth は美しく、Lily はそうではないという違いはあるものの、Lily の風貌が

To the Lighthouse と *A Pale View of Hills* における「アウトサイダー」をめぐって

“[...] her little Chinese eyes and her puckered-up face” (TL 18) / “[...] her Chinese eyes, aslant in her white, puckered little face” (TL 25) / “[...] her little puckered face and her little Chinese eyes” (TL 88) と描写されている一方で、Elizabeth は “[...] had Chinese eyes in a pale face; an Oriental mystery” (MD 160) / “[...] Elizabeth, with her oriental bearing, her inscrutable mystery” (MD 171) / “[...] but her eyes were fine, Chinese, oriental” (MD 176) と描写されている。こうして両者を並べてみると、「中国」的であるとされる外見を両者が共有していることに気付かされる。Mrs. Ramsay が Lily を愚かな可愛い子どもであると見ているように (“[...] her dear Lily, her little Brisk, was a fool.” [TL 45]), Clarissa も Elizabeth を年齢の割りに幼いと考えている。それは Elizabeth には家父長制社会の女性としての自覚がないからだ。Lily が、ヴィクトリア朝のジェンダー・ロールを引き受けないということが、Mrs. Ramsay から見れば Lily が子どもであるということの証になると Williams は指摘している (142)。だが、ここで思い起こしたいのは、「東洋」を保護＝支配の必要な子どもと見る見方は、植民地支配を正当化するための言説であったということだ。「中国」的な風貌を有するという意味で比喩的に「東洋」として表象されている Lily と Elizabeth が、それぞれ子どもとして見られているのは、植民地支配を支えてきた言説が下敷きとなっているということが言える。さらに、Elizabeth に強調されている「東洋」の「謎」とは、オリエンタリズムの反復に過ぎない。

Woolf は、女性が婚姻によって祖国が変わってしまうということを指摘して、偏狭な「愛国心」を女性が持つことの謂れ無さを言っているが (TG 129, 277), これは家父長制社会における女性の立場の危うさを指摘していると考えていだろう。さらに、祖国という概念の危うさとそれを絶対視する狭義の「愛国心」の愚かしさを Woolf は言っているのである。

一方、PVH において女性と国家という問題は出発点にある。PVH は中年の日本人女性 Etsuko の語りから成る。物語上の現在において、イギリス人の夫 Mr Sheringham はすでに亡く、Etsuko は一人でイギリスの田園地帯の家で暮らしている。Etsuko は、Mr Sheringham と結婚する前は、日本人 Jiro の妻であって、彼との間の娘 Keiko を、日本からイギリスに連れて

来ていた。だが、Keiko は Mr Sheringham や、彼と Etsuko の娘である Niki との折り合いが悪く、自室に引き籠りがちになった後、家を出られる年齢になるとすぐに親元を離れて暮らしていた。ところが、彼女はマンチェスターの部屋で首を吊って自殺していたのが発見された。物語上の現在は、彼女の葬儀がすんで間もない。

PVH の大部分は Etsuko の回想が占めるが、彼女は日本でのことは思い出したくないと考えていて (PVH 9)、彼女自身の過去に関する出来事を多くは語らない。そのうえ、次のように語っている。“It is possible that my memory of these events will have grown hazy with time, that things did not happen in quite the way they come back to me today.” (PVH 41)/ “Memory, I realize, can be an unreliable thing; often it is heavily coloured by the circumstances in which one remembers, and no doubt this applies to certain of the recollections I have gathered here.” (PVH 156) 要するに、彼女の語っている過去とは、物語上の事実ではないかもしれないと断っているのだ。このことによって、Etsuko 自身の過去はいっそう隠される。

それでもなお、Etsuko の語りから推測可能な、彼女が直接は語っていない彼女の過去とは、次のようなものであるといえる。1950 年代末から 60 年代初め頃、日本事情に精通した、おそらくは文筆家であろうイギリス人 Mr Sheringham と長崎で出会い (Mr Sheringham に関する情報は非常に少ない)、Jiro と離婚し、7 歳であった娘の Keiko を連れ、それまで暮らしていた長崎を離れ渡英。Mr Sheringham と再婚した。

これらは推測が可能であるというだけで、Etsuko が回想して語っているのは、第二次世界大戦終結から数年が経過し、「最悪の時代はもう過ぎていた」(PVH 11) 頃の長崎で暮らしていたある夏の数週間のことだけである。“American soldiers were as numerous as ever — for there was fighting in Korea [...]” (PVH 11) という箇所から、朝鮮戦争 (1950 年 6 月 25 日～1953 年 7 月 27 日) の頃を想定していると分かる。Etsuko の回想で語られるのは、主に Sachiko のことである。数週間の間だけではあったが、Etsuko は、10 歳ほどの娘の Mariko と近所に住んでいた Sachiko と付き合いがあった。Sachiko の夢は、日本を離れ、アメリカ人の恋人 Frank と

To the Lighthouse と *A Pale View of Hills* における「アウトサイダー」をめぐる

アメリカで新しい生活をするのであった。また、Sachiko は、アメリカには、Mariko の可能性を伸ばせる環境があると考えていた。第一次世界大戦を経て、次の大戦が迫っていた頃に、TG で Woolf が指摘していた女性と国家の問題、すなわち、女性は婚姻で祖国が変わるという可能性を、PVH が小説化しているという見方もできる。つまり、PVH は、第二次世界大戦後の世界で Sachiko/Etsuko が日本/アメリカ/イギリスを関係させる、女性と国家の問題を根底に据えた物語なのである。

家父長制社会における女性の場所を考えた作家として Woolf を捉え、その問題を第二次世界大戦後の世界に持ち込んだ小説として、PVH を論じようというのが本稿の目論見である。こうした関心から PVH を論じるので、PVH における他の諸問題、たとえば第二次世界大戦前は教育者であった Etsuko の夫 Jiro の父 Ogata をめぐる問題には触れないし、原爆の問題や、作家としての Ishiguro 自身の問題には必要以上は関わらない。

しかしながら、Ishiguro と国家・文化の関わり方に関する本稿の立場だけは明らかにしておきたい。日本人の両親を持ち、5歳まで日本で暮らしていたという Ishiguro の小説に、過度に「日本」的なものを読み取ろうとする立場からは本稿は距離を置きたいと考えている。すなわち、たとえば PVH における語られないことの多さに、俳句とのつながりを見出すといった読解 (Lewis 36) が見逃している、イギリス小説としての PVH の側面に注目して、先に提示した問題を論じたい。その意味で、初期の書評で、Ishiguro がたまたま英語で書いた外国人作家であるかのように扱われていたことに、5歳からイギリスで英語を使って暮らしている Ishiguro 自身戸惑ったのではないかと言う Cynthia F. Wong の見方は正しいと考えられる (8)。無論、Ishiguro における「日本」を無視することは不可能で、Mike Petry が、Ishiguro を、イギリス文化と言語に根差しながらも日本を深く知っているイギリス作家と見ている (14-15) という点には同感である。こうした Ishiguro の二文化性とイギリス文化・文学との関わりを、Wong はきわめて適切に見ている。つまり、1980年代から90年代にかけてのイギリスにおける多文化主義・文化的多様性の称揚のコンテクストにおいて、Ishiguro の活躍を捉えることが可能であり、また、Ishiguro の二文化作家という面が脚光を浴びたというのである。それでは、「日本」に精通したイ

ギリス作家 Ishiguro にとっての「日本」がどのようなものであるのかという点については、Barry Lewis は、Ishiguro の「日本」が「国」ではなく、Ishiguro が日本と呼んでいる「システム」であるという立場であり (26)、また Wong は、Ishiguro にとっての「日本」とはフィクションのような構築物であると指摘している (10)。これらの見方が妥当であるということは、次の Ishiguro の発言が裏付けている。もっとも、以下の Ishiguro の発言を、作者 Ishiguro の意図としてではなく、Ishiguro の小説と密接な関連のあるテキストとして引用しているということを確認しておきたい。Ishiguro は、「日本」と彼の小説について次のように語っている。

And I think when I reached the age of perhaps twenty-three or twenty-four I realized that this Japan, which was very precious to me, actually existed only in my imagination, partly because the real Japan has changed greatly between 1960 and later on. I realized that it was a place of my own childhood, and I could never return to this particular Japan. And so I think one of the real reasons why I turned to writing novels was because I wished to recreate this Japan—put together all these memories, and all these imaginary ideas I had about this landscape which I called Japan. (Oe and Ishiguro 110)

この発言を *PVH* だけではなく、日本を舞台としている他の Ishiguro の小説 *An Artist of the Floating World* (1986) などを読解する際にも、日本に対する Ishiguro の立場が表明されているテキストとして考えることができる。

3. イギリス家父長制と *TL*, *PVH*

一方、*TL* において、Lily にとっての Mrs. Ramsay は比喩的な意味で「母」である⁸⁾。その「母」の、Lily を結婚させることによってイギリス家父長制のシステムに彼女を組み入れようとする意図は、Lily が結婚しなかつ

To the Lighthouse と *A Pale View of Hills* における「アウトサイダー」をめぐる

たことによって挫かれてしまう。Lily の「母」への抵抗を、家父長制に対する、そしてそれと車の両輪であった「西洋」中心の歴史に対する抵抗として読解することが可能である。つまり「中国人」のような風貌を持つという Lily は、「西洋」中心の歴史に異議を唱えることのできる立場としての、非「西洋」のメタファーとしてテキストに存在するのだ⁽⁹⁾。つまり、TL の「母」の否定のモチーフは、「西洋」中心の歴史への異議と密接に絡みあっている。「母」をめぐる TL のこうした物語展開を確認して、目を PVH に転じたい。

すでに述べたように、Ishiguro を日本に通じたイギリス作家として捉え、PVH をイギリス小説のコンテクストのなかで見たいと思う。つまり、PVH を、その大部分が Etsuko の日本での出来事の回想から成るイギリス小説であると捉えて読むということである。すると、まず、長崎での Etsuko が、Woolf の言うところの「家庭の天使」(The Angel in the House) の系譜に並ぶ女性であるということが見えてくる。当時、最初の子である Keiko を妊娠中であった Etsuko は、周囲の人々にきっと良い母親になると言われていた。彼女は舅に優しく、夫には逆らわない。一方、Sachiko は、Mariko が学校に行っていないことや、他の子どもたちと喧嘩をしていることを知らされても、気に留めていないらしい (PVH 14-15)。Frank に会うために、あるいは行方をくらましてしまった彼を探すために、Sachiko はしばしば Mariko を残して外出していた。一人になった Mariko は大抵遅くまで猫と外で遊んでいたことも Sachiko は知っていた。当時長崎で起こっていた連続子ども殺人事件の影響で、特に暗くなると外で子どもを見かけることは稀であった (PVH 100) という状況を考えると、このことは由々しい事態である。Etsuko はそんな Mariko の面倒を進んで見ていた。それだけではなく、経済的に困った Sachiko に仕事を世話し、当面の生活資金も貸している。長崎時代の Etsuko と Sachiko とが対照的であるというだけではない。この頃の Etsuko のあり方には、Woolf の捉えた「家庭の天使」像の面影を見ることができるのである。Woolf は、「家庭の天使」を知らない若い世代に「家庭の天使」を次のように「できるだけ簡潔に説明」している。

She was intensely sympathetic. [...] She was utterly unselfish. She excelled in the difficult arts of family life. She sacrificed her-

self daily. [...] — in short she was so constituted that she never had a mind or a wish of her own, but preferred to sympathize always with the minds and wishes of others. (“Professions for Women” 102)

ここで Woolf が要約している「家庭の天使」像は、イギリス家父長制を根底から支えてきたイデオロギーの顛れのひとつであったということを確認しておこう。さらに、*TL* の “The Window” の Ramsay 一家を描いている箇所における Mrs. Ramsay は、詳細な分析によってその隠れた横暴さが浮かび上がってくるものの、「家庭の天使」の典型として描かれているということにも留意したい。そしてまた、長崎時代の Etsuko と夫 Jiro の関係は、*TL* の Ramsay 夫妻の関係と一部共通する側面があるということも見逃せない。Lily は Mr. Ramsay をこのように評している。“He is petty, selfish, vain, egotistical; he is spoilt; he is a tyrant; he wears Mrs. Ramsay to death [...]” (*TL* 24) *TL* において、Mrs. Ramsay は、些細なことで不機嫌になる Mr. Ramsay に気を配り、また常に同情を求めている夫にいつもそれを与える。“There was nobody she revered more. She was not good to tie his shoe strings, she felt.” (*TL* 30) という Mrs. Ramsay の態度は、夫への尊敬と服従を端的に示している。Etsuko と Jiro の関係がどのようなものであったかということは、“Jiro worked hard to do his part for the family and he expected me to do mine; in his own terms, he was a dutiful husband.” (*PVH* 90) という箇所に表れている。Etsuko が Jiro を尊敬していた様子はないが、服従していたことは確かである。Jiro の父 Ogata が Jiro に、Jiro のかつての友人 Shigeo Matsuda に手紙を書いて、Matsuda が雑誌に書いた記事——かつて教育者であった Ogata たちの教育が間違っていたという記事——に関して、Matsuda の真意を尋ねて欲しいと考えているが、Jiro が煮え切らない態度をとり続けているので、そのことに関する彼女の意見を言いたいと Etsuko は考えた。だが、“[...] my husband would have considered it no business of mine to comment on such a matter. [...] it was never in the nature of our relationship to discuss such things openly.” (*PVH* 126-27) という Etsuko の述懐から、夫への尊

To the Lighthouse と *A Pale View of Hills* における「アウトサイダー」をめぐって

敬はないにしても、Mrs. Ramsay と同じような夫への服従を読み取ることは可能だ。つまり、*TL* の “The Window” における Mrs. Ramsay が持っていたのと同じ「家庭の天使」の相貌を、長崎時代の Etsuko も持っていたということである。

また、Etsuko の Sachiko に関する回想に、Etsuko が彼女自身の回想から除外した部分が実は投影されているのではないかと推測できるという読解や、また、Etsuko と Sachiko の物語が相似形を成すように、Keiko と Mariko の物語が重なっている部分が少なくないのではないかという読みができるという指摘は、Brian W. Shaffer, Fumio Yoshioka, Wong, Lewis など多くの論者によってなされてきたとおりであるから、ここでは改めて反復はしない。が、このことだけは確認しておこう。Sachiko が、Etsuko に、彼女の死んだ夫との結婚生活について語ったときのことである。Sachiko の夫は、二人が結婚したとき、Sachiko に彼女がそれまで続けてきた英語の勉強を禁じ、Sachiko はそれに逆らわなかった (*PVH* 110) という話をする。このエピソードを Etsuko が回想し語っているということから、Etsuko 自身の Jiro との生活にもそのような側面があったと推測させる仕掛けとなっている。また、ある晩、Jiro と Etsuko の家に、Jiro の会社の同僚の男性二人が訪ねてきたときのことも、Etsuko は語っている。そのとき、Ogata は二人の家に滞在していた。同僚たちの一方が、選挙に関する妻との意見の食い違いから妻を殴ったという疑いをかけられるエピソード (*PVH* 62-63) は、当時の日本の妻の置かれていた状況のテキスト内現実を示している。また、Mrs. Ramsay が、たとえ彼女自身を消耗させることになっても、夫に服従し、どこまでもついて行くつもりであることは次の箇所を示されている。“[...] however deep he buried himself or climbed high, not for a second should he find himself without her. So boasting of her capacity to surround and protect, there was scarcely a shell of herself left for her to know herself by; all was so lavished and spent [...]” (*TL* 35) こうした夫婦のありかたは、家父長制社会に散見できるものであるから問題にすることははないという見方もあるだろう。しかし、その見方自体が、家父長制のイデオロギーが不可視の権力として遍在しているということの証左である。

さらに、*TL* そして *PVH* の男性たちの共通する特性として、女性の知性の軽視が挙げられる。Mr. Ramsay は、自分を実際以上に無知にみせる Minta が気に入っているし (*TL* 83-84)、Mrs. Ramsay が読書しているのを見て、次のように思う。“And he wondered what she was reading, and exaggerated her ignorance, her simplicity, for he liked to think that she was not clever, not book-learned at all. He wondered if she understood what she was reading. Probably not, he thought.” (*TL* 102) また、Charles Tansley は Lily に “Women can't paint, women can't write...” (*TL* 43) と言う。*PVH* においては、Jiro の同僚たちの一方が、女性というものは “[...] they can choose the country's leaders the same way they choose dresses.” (*PVH* 63) と発言するし、Ogata には、夫婦が別の候補者に投票することは戦後の社会の乱れの象徴にしか見えない。男性が女性の知性を低く見るというこうした姿勢は、イギリス家父長制から由来していることは明らかだ。つまりこの意味で、*PVH* は、*TL* と同様に第一次世界大戦前以降のイギリス家父長制を前提としたテキストであるといえる。*TL* が「母」への抵抗を示す Lily を通してイギリス家父長制を批判しているように、また、*TG* で、戦争と、さらにその戦争と思想面で一体であったイギリス家父長制を攻撃しているように、*PVH* もまた、イギリス家父長制への抵抗を表明しているのだ。

4. オリエンタリズムと「アウトサイダー」

Ishiguro は 1954 年に長崎で生まれ、1960 年、5 歳の頃、海洋学者の父とともに家族でイギリスに移った。先に引用した Ishiguro の発言 (Oe and Ishiguro 110) に見られるように、Ishiguro が彼の小説で再創造しようとした「日本」が、彼自身の「子ども時代の場所」であったことを考えると、*PVH* における Etsuko の回想の舞台が長崎であることに不思議はないとも言えよう。また、先に述べたように、Etsuko が回想しているのは、朝鮮戦争中のことだとされている。当時、多くの米軍の軍艦が佐世保に出入りしていたし、港の主な設備は米軍に再接収されていた。こうした歴史的事実のために、長崎でもアメリカ兵が珍しくなかったであろうという舞台設定の問題

To the Lighthouse と *A Pale View of Hills* における「アウトサイダー」をめぐる
もある⁽¹⁰⁾。さらに、*PVH* において決して前面には現われてはいないが、背
後に確かに存在する原爆——さりげなく 2 回ほどの言及があるのみ (*PVH*
11, 137)——という第二次世界大戦の惨劇の場という意味もある。歴史の崩
壊は、既存のイデオロギーの問い直しを要求したに違いなく、この点では、
TL や *TG* に第一次世界大戦の影響が色濃いのと同じである。しかし *PVH* の
テキストにおける長崎という場所の意味はそれだけではないということを、
本稿では特に *PVH* のイギリス小説としての側面に注目して考えてみたい。
すなわち、オペラ、小説とも長崎を舞台としている *Madame Butterfly* との
イメージ的連続を読み取ることが可能であるということを提唱したい。
John Luther Long の小説 “*Madame Butterfly*”⁽¹¹⁾ は 1898 年にアメリカの
雑誌で発表され、1905 年にはロンドンで他の短編小説とともに単行本とし
て出版された。この小説に基づいて David Belasco が戯曲を書いた。ロン
ドンのデューク・オブ・ヨーク劇場で Giacomo Puccini は *Madame Butter-*
fly の劇を見て、オペラ化を決定、ミラノに帰って Guiseppe Giacosa と
Luigi Illica を台本作者に指名した。1902 年 11 月、小説・戯曲両方を基に
したオペラの台本⁽¹²⁾ が完成、1904 年 2 月 17 日に、ミラノのスカラ座で初演
の運びとなったものの、不評であったため改訂し、その改訂版が同年 5 月
28 日にブレーシアのグランデ劇場で上演され、今度は大成功であった。
1905 年 7 月にはロンドンでも成功を収め、それからというもの、*Madame*
Butterfly は世界中で人気を博する演目となった。もしオペラ *Madame But-*
terfly がなければ小説、戯曲は忘れ去られていたであろうという Reito
Adachi の指摘は正しく (“Transformation (1)” 30)、その意味で *Madame*
Butterfly のイメージとは多分にオペラから得られたものであろうと考え、
Madame Butterfly のヒロインの名前の表記を Long の小説で使われている
Cho-Cho-San ではなく、Puccini のオペラで用いられている Cio-Cio-San
を本稿では用いることにする。また、*Madame Butterfly* については、Long
の小説、Puccini のオペラ以外に映画、翻案などさまざまなヴァージョンが
あり (Heung 253)、しかも Long の小説、Puccini のオペラでも細部にお
いてはかなりの相違が見られる。だが、本稿で *Madame Butterfly* というの
は、長崎を舞台とする Long の小説、Puccini のオペラを主に念頭に置き
つつ、特定のヴァージョンの *Madame Butterfly* というよりも、さまざまな

Madame Butterfly のヴァリエーションに共通する、「西洋」の男の裏切り
にある「東洋」の女の物語を言う。ここで、主に念頭に置いている Long の
小説、Puccini のオペラに共通する *Madame Butterfly* の物語を概観してお
こう。アメリカ海軍中尉 F. B. Pinkerton が、長崎での戯れの結婚を、元士
族の娘で芸者の Cio-Cio-San とする。Pinkerton は長崎を去るが Cio-Cio-
San は結婚が好い加減なものであったということを知らずに、彼との間の
子どもとともに彼を待ち続ける。Pinkerton がアメリカ人の妻と再来日し、
Cio-Cio-San は彼の裏切りが分かって自殺する。もっとも、この *Madame*
Butterfly の物語には、女性の置かれた社会的・文化的な状況の問題だけで
はなく、男性を取り巻く制度に関する問題も考えなくてはならないが、こ
うした問題は本稿では扱わない。

Puccini は英語がほとんど分からないにもかかわらず、*Madame Butterfly*
の劇を見てオペラ化を決定した。その理由には、愛を信じる薄幸の美少女と
いうヒロイン像が気に入ったことに加え、19 世紀半ばから 20 世紀初頭にか
けてのヨーロッパにおけるジャポニズムの流行がある。1862 年のロンドン
万博、1867 年のパリ万博を機に、日本熱は急速に広まっていた。つまり、オ
ペラ *Madame Butterfly* の誕生は、「西洋」から見た「日本」、換言すれば、
芸術的創造としての、あるいはフィクションとしての「日本」が、音楽、美
術などのヨーロッパ文化の至る所に見出せたという歴史的な文脈のなかで捉
えられなくてはならない。このような視点で PVH に向かうとき、PVH と
Madame Butterfly との文化的連続性を指摘できる。同様の指摘は Lewis も
しているし (22-23)、Shaffer は、Sachiko のアメリカ人の恋人 Frank の
名前は、James Joyce の *Dubliners* (1914) の “Eveline” に登場する Frank
——ヒロインの Eveline が Frank とダブリンを離れる夢を見るが、最後に思
いとどまる——だけではなく、Puccini の Benjamin Franklin Pinkerton⁽¹³⁾
をも連想させると述べている (18-21)。が、これらの論は、「西洋」の男
(Frank/Mr Sheringham) と「東洋」の女 (Sachiko/Etsuko) というモチ
ーフの相似の指摘の域をほとんど出ていないので、そこを補いたいというのが
本稿で目指しているところである。ここで PVH と *Madame Butterfly* との
関連を言うとき、それは直接的な影響関係の有無を問題にしているのではな
い。ジャポニズムとの連続のなかの *Madame Butterfly* という、ヨーロッパ

To the Lighthouse と *A Pale View of Hills* における「アウトサイダー」をめぐる
における「日本」表象の歴史を持つ文化圏で生産されたテキストとして、
PVH がその歴史の磁力から無関係ではいられないということを言いたい
のである。すなわち、ジャポニズムの歴史を持つ文化が、それを共有する
テキストに必然的に残す痕跡を言っているのである。歴史・文化の影響から
全く独立して存在するテキストなどあり得ないという立場からの論考を
試みているのだ。

「西洋」の男に裏切られて自殺する「東洋」の女という、悲劇のヒロイン
の造形は、「東洋」を「弱者」と見るオリエンタリズムのひとつの変奏で
あることは明かだ。さらにここで強調しておきたいのは、こうしたヒロイン
像がイギリスでも支持されたのは、オリエンタリズムに加えて、*Madame*
Butterfly の物語には、ヴィクトリア朝の女性に求められた、そして Woolf
も「家庭の天使」の特性として挙げていた、自己犠牲という「美德」の称揚
と讃美が見られたということは否定できない。Marina Heung も指摘して
いるように、*Madame Butterfly* は、ヴィクトリア朝の道徳との関連で、
ヒロインである Cio-Cio-San を自己犠牲をいとわない女性として称揚する
テキストなのだ (232)。

Madame Butterfly に見られるオリエンタリズムの要素とは、彼女が「弱
者」であることだけではない。Jean-Pierre Lehmann は、19 世紀末から 20
世紀初頭の「西洋」の人々が持っていた「日本」のイメージには大別して
2 つのものがあつた、ひとつは “[...] Japan was perceived as a society which
was achieved a very high degree of aesthetic accomplishment.” とい
ったもの、もうひとつは “[...] was of a country inhabited by graceful, char
ming — and complaisant — women.” というものであると述べている (8)。
こうした見方も、「日本」に謎、神秘を、そして「西洋」にはないものを見
出そうとして作り上げるという意味で、オリエンタリズムの変奏であると言
える。不誠実な男を信じて待つという健気で従順な女性としての Cio-Cio-
San 像に、Lehmann の指摘するような「日本」観の反映を見ることができ
る。

Cio-Cio-San が、家父長制社会が求める女性像とオリエンタリズムの複合
体であることを確認し、さらに、Cio-Cio-San を、20 世紀初頭のイギリス
家父長制と帝国主義の歴史的コンテクストに置き直して考えると、「Pinkerton

「Cio-Cio-San」という、「裏切る男 / 裏切りにあって自殺する女」という構図が、「強い西洋 / 弱い東洋」という力関係の平行になっており、さらには、「西洋に追い込まれる東洋」という植民地支配の欲望の暗喩ともなっていると言える。

Madame Butterfly をオリエンタリズムとヴィクトリア朝のジェンダー観の重なるところに生まれたテキストであると見、その連続として *PVH* を捉えることによって、長崎時代の Etsuko が「家庭の天使」であるというだけでなく、Cio-Cio-San のようなジャポニズムの延長にあるヨーロッパ製「日本」女性としての面も持っているということが分かる。

だが、長崎時代の Etsuko が、「家庭の天使」のような家父長制社会における都合のいい女性、あるいは Cio-Cio-San のような従順だけの哀れな女性ではなかったということを、物語上の現在の Etsuko の回想が露呈する。Sachiko の物語が、Etsuko 自身のそれと多分に重なっているのではないかという推測を誘うテクニカルな仕掛けは、Sachiko の母親としての無責任さが、多少は Etsuko のそれでもあったということを暗示している。物語上の現在とは、Niki が、Keiko の自殺後の母親を気遣って（もっとも Niki 自身はそうに語っていないが）、ロンドンでの友人たちとの生活を離れ、Etsuko のもとを訪れ、5日間過ごし、再びロンドンに帰って行くまでのことである。Etsuko は Niki に次のように語る。“But you see, Niki, I knew all along. I knew all along she [Keiko] wouldn't be happy over here. But I decided to bring her just the same.” (*PVH* 176) また、Etsuko はこのようにも回想している。“I do not claim to recall Jiro with affection, but then he was never the oafish man my husband [Mr Sheringham] considered him to be. [...] And indeed, for the seven years he [Jiro] knew his daughter [Keiko], he was a good father to her. Whatever else I convinced myself of during those final days, I never pretended Keiko would not miss him.” (*PVH* 90) こうした箇所が、Etsuko が Sachiko と共有していたであろう母としての失敗を明らかにしている。さらに、長崎時代の Etsuko が読者に示す姿と、物語上の現在の Etsuko が語る彼女自身の過去との乖離が示しているのは、長崎時代の Etsuko = 「家庭の天使」という表面上の姿の否定であり、Cio-Cio-San に投影されている、Lehmann が

指摘したような愛想の良い「日本」女性という虚像への揶揄である。Etsuko は、彼女自身の語りによって、イギリス家父長制の、そしてオリエンタリズムの幻想を突き崩しているのである。家父長制だけではなく、「東洋」を「弱者」と見るオリエンタリズムもまた、イギリス帝国主義を支えてきたイデオロギーであるということを想起すると、イギリス帝国主義と共犯関係にあるイデオロギーが作り上げた幻想を壊すのが、日本人 Etsuko であるということは、重要な意味を持ってくる。イギリスにおける日本人として、彼女は比喩的なレヴェルで「西洋」における「東洋」人としての「アウトサイダー」であり、本稿が問題としている「アウトサイダー」としての役割、つまり支配的なイデオロギーに異議を唱えることのできる視点の主体としての立場を担っているのである。

Niki は夫、子どものために人生を犠牲にしている女性たちがあまりに多いと考えている (PVH 89-90)。Keiko の自殺にしても、Etsuko は母親として最大の努力をした、悪いのは父だという立場である (PVH 176)。さらに Niki は、はっきりとこのように言っている。“It couldn't have been easy, what you did, Mother. You ought to be proud of what you did with your life.” (PVH 90) また、Etsuko のことを詩に書きたいという友人がいるということにも (PVH 89, 177)、母への共感的な態度が見える。TL においては、Lily の絵が「母」Mrs. Ramsay の死後ようやく完成するのに対し、Etsuko は彼女の省略の多い語りによってでも、「家庭の天使」像とオリエンタリズム的な「日本」女性像という虚像を破壊したし、また Niki は Etsuko の沈黙の部分の語りを変えようという意志を示している。Niki の友人が書きたがっているであろう過去のことがら——Jiro との離婚、Mr Sheringham との出会いと再婚等——について Etsuko は、すでに述べたように、何も語っていない⁽¹⁴⁾。そのわけは、彼女の “[...] perhaps out of some selfish desire not to be reminded of the past [...]” (PVH 9) という述懐が、ある程度は説明している。こうした Etsuko の沈黙を、支配的イデオロギーを共有しない「アウトサイダー」であるがゆえの、規範からの逸脱に対する後ろめたさからくる沈黙と解釈することができる。

このような「アウトサイダー」としての母親に共感を示すのが、イギリス人の父と日本人の母を持ち、イギリスで生まれ育った Niki であることに注

目したい。Nikiはその名前自体が、「東洋」と「西洋」の「折衷」(compromise)であり(PVH 9), Mr Sheringham は日本的な名前を娘に付けたがったが、Etsukoは、今、述べたように、過去、つまり日本のことを思い出したくないので、イギリス的な名前がいいと考えた。が、どこことなく「東洋」の響きがあると思った Mr Sheringham は、Niki という名に同意したという(PVH 9)。命名の状況が象徴的に示すように、Nikiは「東洋」と「西洋」の「折衷」としての性質を担っていながらも、多分に「東洋」に傾いているのである。

Lewis, Wong, Petry, Shaffer, Yoshioka などの論者は、Etsuko の語りが Sachiko のそれと重なっているという読みが可能であるということから、Keiko / Mariko のつながりをも読み取ることができると指摘しており、それらの指摘には全く同感である。さらにそれに加えて言えることは、Niki と Keiko の異父姉妹にもまた連続性があるということである⁽¹⁵⁾。彼女たちは Mr Sheringham が認める以上に似ており、また Mr Sheringham は Keiko の幼い頃を知らないが、Etsuko は Keiko と Niki が幼い頃はもっと似ていたと言っている(PVH 94)。また、近隣に住む Mrs Waters は、Keiko に長年ピアノを教え、それから、幼かった Niki に一年ほどピアノを教えた。そのためであろう、彼女は大人になった Niki を見て、Keiko と間違えた(PVH 50)。このエピソードから二人の容姿が似ているということが、少なくとも Niki は日本人の Keiko と間違えられるような日本的な外見であるということが分かる。

Petry は、Niki がやせた、身体的に不安定な印象を与える女という点で、Mariko が幼い頃に東京で見た、嬰兒を運河に沈めて殺し、その数日後自殺したやせた女(PVH 74)と、そしてまた、Sachiko の従姉妹で、やせていて顔色の悪い Yasuko Kawata とに連なっていると言う(PVH 36-37)。Yasuko は葬儀の帰りに喪服で Sachiko と Mariko の母娘を訪ねてきたが、Sachiko は例によって外出中であった(PVH 158-62)。Petry は Yoshioka を引用し(Yoshioka 77-78)、Yasuko を “a messenger of death” と言っている(Petry 36-37)。こうした指摘の妥当性を認めつつ、ここではさらにテキストにおけるやせた女のイメージが、「東洋」性と、また死とに結び付いているということを強調しておきたい。つまり今、見たように、嬰兒殺し

To the Lighthouse と *A Pale View of Hills* における「アウトサイダー」をめぐる

の女や Yasuko といったやせた日本女性が死のイメージを背負っているように、Niki が「子どもの頃からやせていた」(PVH 178) とされているということは、彼女が、日本＝「東洋」を介して「死」とつながっているということを暗喩的に示しているのである。Keiko の自殺を報じた新聞のいくつか、Keiko が日本人であるという事実をとりあげており、それは Etsuko によると、“The English are fond of their idea that our race has an instinct for suicide, as if further explanations are unnecessary” (PVH 10) ということなのだ。つまりテキストにおいて「日本」人であるということには「死」のイメージがつきまとうているということである。そして、Niki は、日本的な外見と「自殺の本能」を Keiko と共有しているのだ。

半分はイギリスの血が流れている Niki は、本稿が問題としている比喩的な意味での「アウトサイダー」性は Etsuko より少ない。だが Niki は、「アウトサイダー」としての Etsuko に理解を示す「インサイダー / アウトサイダー」でもある。Etsuko の詩を書きたがっているという友人との橋渡しをしようとする Niki を、沈黙しようとする「アウトサイダー」に声を与える存在としての、また、「インサイダー」と「アウトサイダー」との仲介をする存在としての「インサイダー / アウトサイダー」として解釈できる。こうした Niki の行動に、家父長制やオリエンタリズムを超えようとする試みを見出すことが可能であり、これこそが、テキストにおける「西洋」と「東洋」の「折衷」としての Niki の役割であると考えられる。だが、詩を書こうとするのが彼女自身ではなく、友人であり、Niki はその橋渡しをするだけであるということに、日本人の母を持つ Niki の「アウトサイダー」性が見える。

さらに、すでに見たように、MD, TL においては「東洋」性が子どものメタファーとなっていた。Clarissa は Elizabeth に対して、Mrs. Ramsay は Lily に対して、それぞれ保護や指導が必要であると感じているが、PVH においては、Etsuko は Niki を自信に満ちた幸福な若い女性 (PVH 94) と考えており、子どもとは見ていないし、Niki の将来には希望を感じている。ここに PVH のテキストが家父長制の言説やオリエンタリズムのステレオタイプからの脱却を試みているのを見ることができる。

それでは、PVH が反オリエンタリズム、反家父長制のテキストとしてだ

け説明がつくのかという問題が残る。夫や子どものために人生を無駄にしている女性が多いと言う Niki に、Etsuko は “I see. So you're saying they should desert their children, are you, Niki?” と問い、Niki が “You know what I mean. It's pathetic when people just waste away their lives.” (PVH 90) と答える。この箇所の Etsuko と Niki の応答はテキスト全体を支配しているとも言える。Etsuko は、彼女自身の Keiko への対し方を、Sachiko と Mariko を回想することで確認する一方で、Niki は Etsuko のやり方を肯定する。さらに、Keiko の「幽霊」が、Etsuko と Niki を悩ませており、Niki が出発する日の早朝、Etsuko が「幽霊」の正体を確かめようとして、それがキッチンでコーヒーを入れている Niki であったことが分かる。ちょうどそのとき、Niki も “bad dreams” を見ていた。どのような夢であったのかは、頑なに言おうとしないものの、Keiko の夢であることは明らかだ (PVH 174-75)。このように、Keiko の「幽霊」が「消滅」したり、また、冒頭では小糠雨が降っていたが、ロンドンに戻る Niki を Etsuko が見送るときには晴れているといった事柄が、Etsuko が彼女自身の過去と折り合いをつけたような印象を与える。さらに次のような Niki と Etsuko のやり取りもある。Niki は、Etsuko に次のように問う。Niki が学校に行くわけでもなく、ロンドンでただ友人たちと暮らしているということが、母として不安ではないのかと、また Mrs Waters が尋ねたように、彼女のことを人に聞かれたら Etsuko はどう答えるのかと。Etsuko はありのままを答えると Niki に答え、このように続ける。 “‘I'm not ashamed of you, Niki,’ I said. ‘You must live as you think best.’” (PVH 180-81) こうした姿勢は、Etsuko が彼女自身に言い聞かせている言葉でもあろうという読みが可能であるし、さらに Yoshioka の言葉を借りると、独自の価値体系を持つ “a new breed of women” (85) としての Niki への可能性こそが、テキストが示す姿勢であるという読みも可能だ。

だが、Etsuko の生き方への Niki の称揚に、Etsuko は次のような懐疑を示す。 “Besides, she [Niki] has little idea of what actually occurred during those last days in Nagasaki. One supposes she has built up some sort of picture from what her father has told her. Such a picture, inevitably, would have its inaccuracies.” (PVH 90) Niki の反「家庭の天使」称揚と、

To the Lighthouse と *A Pale View of Hills* における「アウトサイダー」をめぐる
オリエンタリズムの打破への評価に対する疑問を提示しているのが、この
Etsuko の述懐なのだ。これを念頭に置くと、Etsuko の母親としての失敗、
つまり「家庭の天使」像への抵抗の処罰として、娘 Keiko の自殺を捉える
ことができるという読解の可能性は消えない。また、オリエンタリズム的
「日本」女性像への抵抗の結果が、Cio-Cio-San の自殺のような母の死では
なく、娘が命を絶つこととなったという意味で、*PVH* を、悲劇としての
Madame Butterfly のヴァリエーションとして見るという読解も成り立つ。
PVH は、このようにさまざまな読解の可能性を示し、*TG* における Woolf
の主張のひとつである偏狭さへの反発に応えるようなテキストとなっている。

《注》

- (1) 次に用いるとき以降、*TG* と略記する。
- (2) Woolf 自身注意深く括弧付で用いている。本稿で言う「愛国心」とは、
Woolf が批判の対象とした狭義のそれを指すこととする。
- (3) 次に用いるとき以降、*TL* と略記する。
- (4) この問題については拙論「V. ウルフ『灯台へ』におけるリリーの「中国人
のような眼」について—オリエンタリズム再考—」で論じた。
- (5) 本稿におけるオリエンタリズムとは、Edward W. Said の提唱した概念を出
発点とし、主として謎・神秘・不可解の東洋というステレオタイプをさす。
Heine and Fu が言っているように、Said のオリエンタリズムの概念は、主
としてイスラム・近東に対してであったが、日本の表象にもあてはまる (xvi)。
- (6) 次に用いるとき以降、*PVH* と略記する。なお、本稿における登場人物名の
Mr / Mr. あるいは Mrs / Mrs. 等の表記は、その人物が登場する作品の使用テ
キストの表記に準じた。具体例を挙げると、*TL* においては Mrs. Ramsay で
あるが、*PVH* では Mr Sheringham の表記を用いるということである。
- (7) 次に用いるとき以降、*MD* と略記する。
- (8) 批評上の常識とされる Mrs. Ramsay / Lily の比喩的な意味での母娘関係に
ついては、Abel 47, 147 を参照されたい。
- (9) この問題については拙論「V. ウルフ『灯台へ』におけるリリーの「中国人
のような眼」について—オリエンタリズム再考—」で論じた。
- (10) Ishiguro は、歴史そのものに関心があるのではなく、彼の関心を表現する
のに適切な時代設定で小説を書いているという姿勢をとっている (Oe and
Ishiguro 115)。
- (11) 本稿では、「Madame Butterfly」(Puccini 25-59) を用いた。なお、Long
の小説ではヒロインは Cho-Cho-San と呼ばれている。
- (12) 本稿では「Madama Butterfly」(Puccini 67-125) を用いた。ここに収めら
れているイタリア語の台本は、1904 年のスカラ座での初演のときのものであ
る。ブレーシアでの上演の際の改訂をさらに改めたものが、1906 年 12 月 28

日にパリで上演され、そのときの台本が現在に至るまでの伝統的なものとなっているが、これらの Puccini の改変に関しては、脚注に載っている。英語版は、1906 年 10 月のアメリカでの上演のために R. H. Elkin が英訳したもので、そのため、Puccini がパリでの上演のために改変したものが改まっていなかったり、削除したものが入っていたりする箇所もある。また、原文のすべてを英訳しているわけではないので、省かれている箇所は編者 Nicholas John が補った。Elkin の英語訳には何年にもわたって改変が行われているので、ここに収められているものはイングリッシュナショナルオペラ (English National Opera) で現在上演されているものに準じている (Piccini 67)。

- (13) オペラにおける Pinkerton の名前は、ミラノの初演、そしてその後わずかの間は Francis Blummy Pinkerton であったという。1906 年のパリでの公演以降は Benjamin Franklin である。
- (14) Paul Bailey は特に Mr Sheringham の描写がもっとあればよかったと考えていて、語られないことの多さを高く評価してはいない。
- (15) このような登場人物たちの重なりに関しては、本稿ではイメージ的連続を指摘するだけにとどめたが、Doppelgänger という観点からの分析も可能であろう。Robert Alter は Doppelgänger の分類をしており、Petry は Alter の分類を用いた分析をしている (56-57)。

引用文献

- Abel, Elizabeth. *Virginia Woolf and the Fictions of Psychoanalysis*. Chicago: U of Chicago P, 1989.
- Adachi, Reito. "Transformations of Butterfly Figure: From a Greek Myth of Psyche to *M. Butterfly* (1)" *Bulletin of Mimasaka Women's College and Mimasaka Junior College*, 42 (1997): 29-35.
- Alter, Robert. "Playing Host to the Doppelgänger." *The Times Literary Supplement*. 24 Oct. 1986: 1190.
- Bailey, Paul. "Private Desolation." *The Times Literary Supplement*. 19 Feb. 1982: 179.
- Heine, Steven and Charles Wei-hsun Fu. Introduction: From "The Beautiful" to "The Dubious": Japanese Traditionalism, Modernism, Postmodernism. *Japan in Traditional and Postmodern Perspectives*. Ed. Fu and Heine. Albany: State U of New York P, 1995. vii-xxi.
- Heung, Marina. "The Family Romance of Orientalism: From *Madame Butterfly* to *Indochine*." *Forming and Reforming Identity*. Ed. Carol Siegel and Ann Kibbey. New York: New York U P, 1995. 222-56.
- Ishiguro, Kazuo. *A Pale View of Hills*. London: Faber and Faber, 1982.
- Joyce, James. *Dubliners*. Ed. Terence Brown. Harmondsworth: Penguin, 1992.
- Lehmann, Jean-Pierre. "Images of the Orient." Puccini. *Madam Butterfly*. *Madama Butterfly*. Ed. Nicholas John. 7-14.
- Lewis, Barry. *Kazuo Ishiguro*. Manchester: Manchester U P, 2000.

To the Lighthouse と *A Pale View of Hills* における「アウトサイダー」をめぐる

- Oe, Kenzaburo, and Kazuo Ishiguro. "The Novelist in Today's World: A Conversation." *Boundary 2*, 18 (1991) 109-22.
- Petry, Mike. *Narratives of Memory and Identity: The Novels of Kazuo Ishiguro*. Frankfurt am Main: Peter Lang, 1999.
- Puccini, Giacomo. *Madam Butterfly: Madama Butterfly*. Ed. Nicholas John. London: Calder, 1990.
- Said, Edward W. *Orientalism*. New York: Vintage, 1994.
- 榎原理枝子「V. ウルフ『灯台へ』におけるリリーの「中国人のような眼」について—オリエンタリズム再考—」十文字学園女子大学『社会情報論叢』第5号, 2001年12月, 107-27.
- Shaffer, Brian W. *Understanding Kazuo Ishiguro*. Columbia: U of South Carolina P, 1998.
- Williams, Lisa. *The Artist as Outsider in the Novels of Toni Morrison and Virginia Woolf*. Westport: Greenwood, 2000.
- Wong, F. Cynthia. *Kazuo Ishiguro*. Horndon: Northcote, 2000.
- Woolf, Virginia. *Mrs Dalloway*. Ed. Claire Tomalin. Oxford: Oxford U P, 1992.
- _____. "Professions for Women." *The Crowded Dance of Modern Life: Selected Essays*. Ed. Rachel Bowlby. Harmondsworth: Penguin, 1993. 101-06.
- _____. *A Room of One's Own and Three Guineas*. Ed. Michèle Barrett. Harmondsworth: Penguin, 1993.
- _____. *To the Lighthouse*. Ed. Susan Dick. Oxford: Blackwell, 1992.
- Yoshioka, Fumio. "Beyond the Division of East and West—Kazuo Ishiguro's *A Pale View of Hills*—." *Studies in English Literature*. 20 Mar. 1988: 71-86.

Outsiders in Virginia Woolf's *To the Lighthouse* and
Kazuo Ishiguro's *A Pale View of Hills*

Rieko Sakakibara

Abstract

Thinking war as logical results of overemphasizing the superiority of one's own country, Virginia Woolf criticizes the educational system and the patriarchy as conspiring with the imperialism in *Three Guineas*. In this essay, she sketches the "Outsiders' Society," which would consist of those who are excluded from the system, the "daughters of educated men" in Woolf's words. In this respect, Lily in Woolf's *To the Lighthouse* is considered to be descended from the "outsiders." The object in this paper is to discuss *A Pale View of Hills* by Kazuo Ishiguro along with *To the Lighthouse* in order to argue the representations of the outsiders especially from the perspective of the descriptions of the non-Western women including the figurative ones. As Lily's alienation in British patriarchal system is reflected in the descriptions of her Chinese eyes, so is the outsider aspect of Etsuko in *A Pale View of Hills* explicit in her status as a Japanese woman who left home for her marriage to an Englishman, as well as that of their daughter Niki, half-Japanese. Other concerns such as the Western stereotype of the East and the representations of women are also examined.